

公園の管理組織を保育所が担う意義と課題（2）

下村 一彦*・石垣 文**・佐藤 将之***

本研究の目的は、街区公園の管理を行政から委託されているいふくまち保育園（福岡市）を事例に、公園環境の維持管理に保育施設がより主体的に携わる公園活用への視座を構築することである。前稿で整理した保育環境としても充実した公園環境を、実際に関係者がどう受け止めているのかを把握するために、公園の維持管理・充実に取り組んだ保育者への聞き取り、子どもによる写真投影法と聞き取り、公園イベントに参加している保護者や地域住民へのアンケート調査を行った。保育者では、環境整備に対する主体性や、公共空間という制約を地域との交流機会として前向きに捉える姿勢等が見られ、保護者と地域住民も公園の清潔さや治安の向上を評価し、課題と想定された占有も懸念に止まっている。保育施設を地域に開く姿勢が、保育の向上に止まらない豊かな交流を生み出し、保護者からも地域住民としての意識等を引き出していることは示唆に富んでいる。

はじめに

本研究では、保育施設⁽¹⁾での公園活用の傾向（椎野 2017）や、公園活用に向けた課題の指摘（三輪他 2008）等に関する先行研究を踏まえて、公園環境の維持管理に保育施設がより主体的に携わる公園活用への視座を構築することを目的に、隣接する古小鳥公園の「公園愛護会」を担う企業主導型保育所いふくまち保育園（福岡市）の取り組みに着目した。

前稿（下村 2022）では、園の取り組みの意義と課題を整理した。意義としては、①毎朝の清掃活動による衛生的で裸足でも遊べる安心感やそれによる未就園家庭や小学生の利用、②屋台の設置による遊びの拠点確保、③園と公園の境界線にあるフェンスの撤去とテラスの設置による公園への動線・中間領域の確保、④畑の整備による自然体験の継続性や多様性の充実等、公園が保育環境としても充実したことがある。他方、⑤整備資金、⑥遊具の裁量権（既製品遊具のハザード除去）、⑦地域理解のためまぬ獲得が課題であった。

*東北文教大学

**広島大学大学院

***早稲田大学

ただし、以上の成果は筆者による記録と園長・主任へのインタビュー調査を通して得られたものである。そこで本稿では、関係者が実際にどのように受け止めているのか、すなわち、園児や保育者はどのように感じているのか、また、保護者の他、公園という公共空間であるだけに地域住民はどう感じているのかを把握することで、いふくまち保育園の事例研究を通して前稿で構築を図った公園活用への視座を深めることを目的とする。

なお、いふくまち保育園を運営する(株)アルバスは、入園希望者の増加に対応し、2021年4月、100mほどの距離に‘ごしょがだに’保育園(企業主導型、定員30名)を開園した。同園にも園庭はなく、古小烏公園を重要な外遊びの場として活用している。本調査に協力して貰った園児5名は、年長進級時に全員、ごしょがだに保育園に移っている他、保護者も、両園を対象に調査を行っているが、前稿との連続性、表記の長さの観点から、本稿では、アンケートの引用等を除き、両園を総称して、いふくまち保育園と表記する。

本稿の構成と研究方法は以下の通りである。第Ⅰ章では、オンラインでのアンケート調査を通して、前稿での調査以降に取り組みされた環境整備も含めて保育者の認識を整理する。第Ⅱ章では、写真投影法を通して、園児の環境の好みや遊び方の傾向を把握し、第Ⅰ章での保育者の認識と合わせて考察する。第Ⅲ章では、イベント時に公園を訪れた保護者と地域住民への郵送アンケート調査を通して、保護者の園選択理由や満足度も把握しつつ、公園活用の意義と課題を整理する。

I. 公園環境の整備に携わる保育者の認識

本章では、保育者の認識をまとめる。アンケート調査は全て記述式の設問としたため、聞き取り形式での実施を予定していたが、新型コロナウイルスへの配慮から、2020年8月～9月中旬に、園長を介してグーグルフォームへの記名回答を依頼する形で実施し、全職員16名中、園長・主任を含む9名から回答を得た。なお、前稿でも触れたが、一般的に、保育施設が公園管理を担うとなると保育者の負担感が予想される。いふくまち保育園の職員に負担感がない訳ではないが、同園では職員募集時点で公園愛護会(開園の2018年3月に先立つ2017年8月に設立)を担っていたことから、一定程度意識のある保育者が集っていたと想定されることを踏まえて、以下の結果を認識する必要がある。

【表1】子どもに対する主な印象の変化

筆者による分類	(人)	内容で分割し分類しているため、本表記載分で7名分
屋外へのアフォーダンス	3	・芝生に寝転ぶなど、よりいきいきと遊ぶようになった ・公園に出たがるようになった
自然との関わりの豊かさ	3	・生き物や季節の変化に敏感 ・遊具だけでなく、自然物ともしゃがんでじっくりと遊ぶ
子ども・遊びへの理解の深化	2	・交流する小学生への憧れ方に園児の「新たな一面」を感じた ・泥んこ遊びや団子づくりをやりたがる小学生の多さ、遊ぶ姿が自身の子ども時代と変わりがなく驚いた

【表2】 保育者が公園で新たに行うようになった主な行動や活動

分類	(人)	7名分の回答
自然物への関心の高まり	7	・名称を調べる ・手入れをする ・虫に慣れた
公共空間としての配慮	3	・地域の公園利用者への積極的コミュニケーション ・育児相談に応じる

【表3】 保育者が公園で行わなくなった主な行動や活動

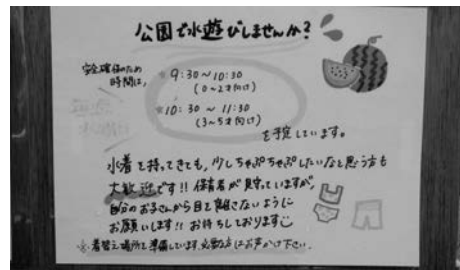
分類	(人)	8名分の回答
ない	5	・特にない ・思いつかない
占有	3	・公園を使うときはなるべく端の方でやろうと思ったり、いつもいつも公園全体を使うということは無くなりました ・地域の方達の利用も増え、安全面を考えると保育者と一緒に鬼ごっこをする場面が減ってきた

【表1】に環境整備を進めたことで保育者が感じている、子どもの印象の変化をまとめた。自然物を中心に外遊びに意欲的になる園児の姿を肯定的に受け止めている回答が多い。加えて、魅力的な公共空間となったことで小学生と関わる機会も生まれ、園児にとってのモデル効果に加えて、保育者の子ども観・理解も深まっていることは注目される。

【表2】には、保育者自身が新たに行うようになったことをまとめた。保育者の自然物への関心の高まりは、【表1】でまとめた子どもの姿との相乗効果といえる。また、表に整理した以外の少数意見には「裸足で過ごす、危険なものが落ちていないか探す」という整備の成果を感じながら当事者として取り組む保育者の姿も見られる。

他方、【表2】の設問とは反対の「行わなくなったこと」を【表3】にまとめた。公園の「占有」を行わないと回答した3名の保育者の内、2名は【表2】の「公共空間としての配慮」に分類した回答をしており、単なる占有回避ではなく、交流を通して共有を目指す姿勢が伺われる。その中で、未就園家庭の育児相談の機会が生まれている公益性は注目に値する。なお、公園入口に【写真1】のような水遊びへの誘い掛けの掲示を行い、未就園児親子の保育参加も積極的に受け入れている。

以上のような子ども観構築や実践を通して、「都心のビルに囲まれた環境で逞しく自然と触れ合えることが園庭でなくてもできることに驚きました。(以下省略)」と、公共空間でも主体的に保育施設（保育者）が関与する重要性を語ってくれた保育者もいる。また、公共空間である公園は、上述のように占有回避という制約を伴うが、公共空間であるがゆえに園の保育の質の向上にもつながると感じている以下の回答は、今後の公園活用の推進にとって心強い。



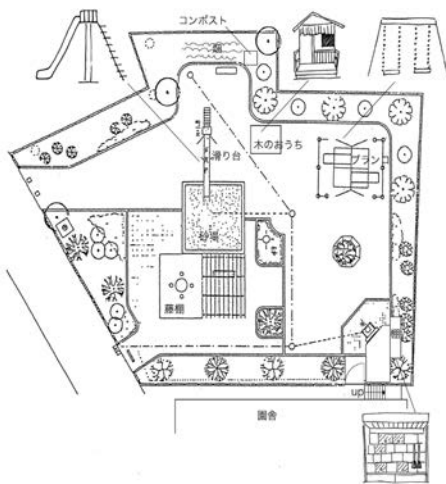
【写真1】 水遊びの告知・勧誘掲示

- ・「園庭だと、園内の子どもや大人だけで遊ぶ空間ですが、公園ならではの保育に可能性を感じています。より社会との繋がりを感じやすいと思います。」
- ・「公園なので、はじめはもっといろいろな方が利用するであろうと多少の不安もあつ

たが、実際にはそこを子育ての拠点の1つとしている親子同士のつながりの場としてゆるやかに優しく繋がっていると感じる。(中略) 同じ地域で子育てをしているという開放的な公園コミュニティがあり、利用者にも保育園側にとってもいいことだと感じる。」

【表4】望ましいと思う場所と主な理由 ※場所ではない各1名の回答3件を除外

分類	(人)	主な理由の趣旨
畑	9	・子どもの愛着 ・栽培活動の「継続性」が保障されている。 ※「畑」には「菜園」「果樹」との回答を含む。
芝生	8	・コンクリートを剥がした安全性 ・裸足での活動 ・子どもが寝転がる姿
砂場	6	・可塑性 ・感触
屋台	5	・おままごと等のごっこ遊びの広がり ※【図1】の「木のおうち」のこと
花壇	5	・植生の豊かさ ・虫捕り ・匂い
水場周辺	3	・水の流れ ・泥遊びの充実



【図1】古小鳥公園の俯瞰図(2)

【表5】望ましくないと思う場所と主な理由

※場所ではない各1名の回答3件を除外

分類	場所	(人)	主な理由
安全関連	滑り台	5	落下事例
	ブランコ	2	衝突事例
	水場のタイル	2	転倒事例
	東屋の鉄製支柱	1	衝突事例
	棘のある木	1	不人気
	水場近くの木	1	毛虫が危険
遊びの充実に向けて	平坦な地面	2	歩行の発達 の未熟さ
	木陰の少なさ	1	夏場の暑さ
	土質	1	泥団子に不向き

つぎに、保育者が公園環境の中で<望ましい><望ましくない>と感じている場所と理由を【表4】【表5】にまとめ、合わせて、その場所を示す俯瞰的なイラスト【図1】を記載した。【表4・5】は、1人につき最大で5つまで回答を求めた結果である。

「愛着があり休日も公園を素通りできない」という園長の思いにも象徴されるが、【表4】の回答上位5か所は、保育者が整備に携わった場所であり、保育者のやりがい等の面からも、主体的に保育環境を整備する意義が公園であっても感じられる。

また、自然物のある場所の回答が多いのは、【表5】の望ましくない場所に既製遊具や鉄製品が多いのと対照的である。望ましくない理由には、落下や転倒など、大きな怪我はなかったもののヒヤリハットの事例が多く挙げられており、【表4】の<芝生>にも、安全性の向上を理由とする回答があるように、保育者のハザード除去への意識は非常に高い。ただし、安全性だけが自然物を望ましいとする理由ではなく、保育者全員が選択した「畑」(【表4】参照)において、子どもが「愛着」を抱いている

等、変化や応答性、活動の継続性を保障することの有効性も保育者は感じている。

先にも触れたが【表5】の回答数上位4か所では、実際のヒヤリハット事例が発生している。それに対して、いふくまち保育園では使用に制限をかけるのではなく、行政とも協力しながら、主体的に対応してきた。【写真2～7】は、主な対応を前後比較できるように示したものである。まず、【写真2⇒5】の芝生化と【写真3⇒6】の緑化の拡張は、『緑の環境プラン大賞（公益財団法人都市緑化機構）』に応募して資金を獲得すること（前稿執筆後に受賞）から始めて、転倒時などの負担を軽減するとともに、凹凸のある地面を踏みしめて歩くことの保障を図ったものである⁽³⁾。つぎに、【写真4⇒7】は、本アンケート実施後に保育者が施工したものであり、対応の迅速さからも主体性が伺われる。その他にも、滑り台周辺の砂場枠組みのコンクリートを土嚢で覆う等の応急的な対応も採っている。

ただし、前稿でも触れたが、固定遊具の滑り台とブランコに関しては裁量権の問題で本格的な変更（滑り台を築山に埋め込む、ブランコの座面や鎖の素材を変更する）は行っていない。その中で、小学生など園児以外の子どもであっても、誰かがブランコで遊んでいたら園児の安全確保の観点からも見守りにつくといった保育者間の約束事に対応しているが、人的な対応は、保育者の負担になっていると主任は感じている。

本章では、公園環境やその整備に対する保育者の受け止めを整理、分析したが、次章では、園児の受け止めを整理し、保育者の認識と合わせて分析する。



【写真2】 パーゴラ空間



【写真3】 植え込みの周囲



【写真4】 水場周辺



【写真5】
コンクリートから芝生化



【写真6】
地面へのクラピアの植栽



【写真7】 タイルを覆う
ウッドデッキの拡張

II. 園児の認識

園児の環境への認識を把握する手法として、写真投影法を用いた。具体的には、園児にカメラを渡し、公園内の好きな場所を3か所撮影して貰い、その場所で何をして遊ぶことが好きなのかを筆者が聞き取った。

調査は、2回（2020年9月24日、2021年11月8日）実施した。調査対象は、1回目

の2020年9月時点の在園児19名の最年長である年中児5名とした。【表6】がその結果であり、理由(何をするのが好きか)の具体的な回答がなかったものを「—」表記している。1回目調査は午後(13時頃)に筆者2名で、2回目調査はお昼ご飯前(11時頃)に筆者1名で実施している。2回目の際は、調査前が室内での活動(園外での山登りの振り返り)だったのに対し、1回目の際は、午前中が【写真8】のような収穫活動(紫蘇や柑橘系果樹を収穫して、その場でも食べる)であり、午前中の活動の影響が考えられる。したがって、対象児が少人数であることも合わせ、断定的な分析を行う意図はないが、以下に興味深い傾向を3点整理しておく。

【表6】写真投影法の結果：上段が場所 下段が理由の行為

	時期	1つ目	2つ目	3つ目
A	2020 年中	畑	屋台	ダンプカーの玩具
		収穫して食べる	ごっこ遊び	押して遊ぶ
	2021	(調査日に欠席)		
B	2020 年中	屋台近くの柑橘樹	ブランコ	水場近くの樹木
		収穫して食べる	—	毛虫がいる
	2021 年長	ブランコ	パーゴラ	ベンチ
鎖を登る		登る	ごっこ遊び	
C	2020 年中	屋台	ダンプカーの玩具	パーゴラ空間の椅子
		黒板に書く	押して遊ぶ	—
	2021 年長	屋台	ブランコの柵	滑り台
屋根に登る		鉄棒や一本橋	途中から飛び降りる	
D	2020 年中	滑り台	ブランコ	屋台
		後ろ向きに滑る	反り返って乗る	ごっこ遊び
	2021 年長	道路側花壇の樹木	屋台の裏の隙間	屋台
乗り物ごっこ		かくれんぼ	屋根に登る	
E	2020 年中	屋台近くの柑橘樹	滑り台	屋台
		匂いを嗅ぐ	滑る	泥団子遊び
	2021 年長	ブランコ	屋台	ブランコの柵
立ちこぎや回転		屋根の上で遊ぶ	鉄棒として遊ぶ	



【写真8】2020年9月24日
畑での紫蘇の収穫



【写真9】
屋台周辺の場：拠点の充実



【写真10】オリジナルロゴ
入り手造りテーブルと椅子

1つ目は、1回目の調査での園児の好きと保育者の望ましいの一致である。第I章での保育者への調査は本章の1回目調査と同じ時期に実施しているが、園児が好きな場所として、園が設置した<屋台等の拠点>が5件(A-2、C-1・3、D-3、E-3)、園が手入れしている樹木や畑の自然物が4件(A-1、B-1・3、E-1)と回答の多くを占めている。保育者が認識する拠点の有効性と自然物の豊かさを園児の視点からも確認できるのである。なお、本調査の2回目の様子を見ていた年中以下の園児から実施希望の申し出があり、数名の追加記録を行ったが、自然物の豊かさを園児も感じていることをより認識できる結果として、①ブランコが好きという4歳児の理由が、「こぎながら花壇の黄色い花を見るのが好き」、②園舎近くの花壇や樹木が好きという2歳児の理由が、「はっぱと小さい花が好き」であったことを付記しておく。また、【写真9・10】は、1回目の調査以降、保育者の手造りにより充実が図られた

拠点の構成物である。

2つ目は、1回目の調査での園児の遊び方と＜保育者の望ましくない＞ものの一一致である。滑り台とブランコという既製品遊具を選択した園児Dの理由は、「後ろ向きに滑る」「反り返って乗る」等、遊具メーカーの規定外の遊び方の面白さにあった。既製品遊具での落下や衝突といったヒヤリハット体験から、それらを望ましくない（改修したい）という保育者の認識をある程度裏付ける形である。保護者の個別の付き添いを前提とする公園遊具の課題がより明確になったといえる。

3つ目は、年中児（2020）が年長（2021）になっての遊び方の転換である。既製品遊具での挑戦的な遊び（B-1・2、C-2・3）が見られることに加えて、園児C・D・Eの3人が好きな場所として引き続き＜屋台＞を挙げながら、「登る」を理由に挙げていることは興味深い。手造りの＜屋台＞が、拠点（群れて遊ぶ場）機能とともに、屋根空間により高所の役割も担う有意義さを示す一方で、小規模公園で年長児の成長（挑戦）への欲求を充足する環境整備の難しさを突き付ける結果である。この点に関して、いふくまち保育園が保育を園舎と園庭（古小鳥公園）で完結させず、近隣の野山での園外保育にも積極的に取り組んでいることは示唆に富んでいる。

Ⅲ. 保護者と地域住民の評価に見る意義と課題

Ⅲ-1. ＜公園バザー＞の様子とアンケート調査の概要

本章では、公共空間である公園を園庭として本格的に活用していることを、保護者や地域住民はどのように受け止めているのかを分析する。調査手法のアンケートは以下のイベントの際に協力を頂いて実施した。

いふくまち保育園では、保護者有志が企画し、園が協賛して『公園バザー』を開催している。【写真11~13】に見られるように、第5回（2021年11月6日）も、趣向を凝らしたステージの他、多様なコーナー（リサイクルバザー品・農産物・文房具の販売、飲食店、駄菓子景品のゲーム、園児の手造り商品やオリジナルの公園ロゴ入りグッズの販売）が設けられ、収益は公園の維持管理費として寄付されている。出入りが自由な場のため、正確な来場者数は把握できていないが、子どもも含めて200人以上は集っていた。



【写真11】
接道からの公園内の様子



【写真12】 ウッドデッキ：
演奏・人形劇等のステージ



【写真13】 小屋（屋台）：
地域・保護者の出店販売

上述の公園バザー会場にて、各来場者の帰宅時に、アンケートの趣旨を説明した上で筆者2名がアンケートを配布し、11月末までの無記名での郵送回答を依頼した。

配布数は100通（バザー時の配布70通、バザー翌日に園からバザーでは配布しきれなかった保護者に30通）で、39通の回答があった。以下には、園職員でもある保護者の回答を含むが、属性において職員とだけ回答のあった1通を除き、38通を分析対象とした。

回答者38名の内訳は、＜園児の家族＞21名、＜地域住民＞17名（職員の家族2名を含む）である。＜地域住民＞は、自転車・バス・車・無回答が各1名の他、13名が徒歩（1～45分、平均13.9分）で来場している。職員の家族2名以外の地域住民15名には、公園バザーを知ったきっかけが「知人・友人からの口コミ」と「保育園のHPやSNS」という、園や職員との以前からの親しさを伺わせる7名がいる一方で、「保育園からの配布物」3名、「店舗置き型のチラシ」1名、「偶然通りがかった」4名もあり、少数ではあるが多様な意見が収集できたと認識している。

Ⅲ－2. 保護者の園選択理由と満足度

本節では、次節において保護者と地域住民の公園環境に対する受け止めを整理する前に、その受け止めにも影響すると推察される保護者の入園動機や満足度を整理、分析しておく。【表7】に園に対する満足度、【表8】に入園動機をまとめた。

【表7】の低評価3件の内1件は、「どちらかという不満」をつけた項目は、コロナ禍ということもあり、満足いく状況ではありません。入園前に提示いただいていたイベント・行事ができていないのは残念です。」と理由を回答している。他の2件は理由の記述がないが、上記の回答の中にもあるように、新型コロナウイルス禍の制約を受ける中で、＜他の家庭との関係＞構築の機会設定や＜園行事＞が十分に実施できないことはやむを得ないことであり、園への不満とは言い切れない。その上で、全ての項目において高評価であり、保護者の園への満足度は非常に高いといえる。

【表7】保護者21名の園への満足度（人）

	高評価		⇔	低評価	
	満足	不満		満足	不満
総合評価	17	4	0	0	0
日々の保育内容や子どもの様子・成長	17	4	0	0	0
食育への取り組み	18	3	0	0	0
公園でのイベント含めた園行事	12	7	1	1	0
園長やスタッフとの関係、園からの情報発信	14	7	0	0	0
他の在園家庭との関係	12	6	1	2	0
維持管理も担いながら 独自に公園を活用していること	20	1	0	0	0

※評価は、高評価に分類した「非常に満足」「どちらかという満足」「どちらでもない」。低評価に分類した「どちらかという不満」「非常に不満」の5段階である。

【表8】入園動機（人）

	第1	第2	第3
園長を含む保育者の人柄	11	3	2
小規模で丁寧な関わり等	2	7	3
食育への取り組み	0	3	6
公園で遊ぶ園児の姿	1	5	1
認可園の待機児童	2	0	1
外遊びの重視	0	0	1
勤め先や同僚の推薦	0	0	0

※保護者21名から保育者でもある2名を除いて集計したため、各項目最大値は19である。

※表中の7項目は選択肢として想定したものであり、その他の自由記述として、「理念への共感」が2件（1-0-1）、「通いやすさ」が2件（1-0-1）あった。

つぎに、【表8】入園動機ではまず、〈園長を含む保育者の人柄〉を16名が選択し、内11名が第1要因に挙げていることが目をひく。前稿で述べたように、酒井園長は地域づくりの視点で園を運営し、園内外で多様な人々が交流することを目指していた。また、保育者に関しても、シュタイナーやモンテッソーリ、レッジョ・エミリア等、前職の理念や深く学んできた保育が異なる集団であることを大切にし、何か1つの保育思想に依拠しない運営が心掛けられている。その理念や理念と不可分の人柄に共感した保護者が多くいたということなのだが、それらの保護者は、【表7】の高い満足度の園評価の理由記述においても、期待に沿う園運営であったことを以下のように述べている。

- ・「特定の思想に縛られることなく、柔軟な方針を取り入れること。（以下省略）」
- ・「（前略：他の認可外園を見学した際の）園が閉ざされている感じに、ここで子どもがすごすのかとつらい気持ちになった。防犯上なのかもしれないけど。いふくまち・ごしょがだには、外とつながろうという（自然とも、人とも、街とも）空気に満ちているところがとても良いと思う。」
- ・「園長の柔軟な統率力。個々の保育者・職員の方のバラエティに富んだパーソナリティ。また園を取り巻く地域住民の大人達との協力体制。園に協力して下さる様々なアーティスト、研究者、表現者の方々等々。小さな小さな子ども達に大人の本気の力で対峙して貰い、保護者として本当に唯一無二の育ち合いの場だと思えます。」

いふくまち保育園に関わる大人の多様性に加えて、地域に対して開かれていることに価値をおく保護者が多いことは、公共空間である公園を管理・活用する園にとって大きかったといえる。加えて、【表8】の〈認可園の待機児童〉を入園理由に挙げる3名の内、第1要因の1名は、「（前略）この園に入って見て、開かれていると感じた。誰に対しても。近所の人とのつながりを大切に、他者との関わりを無くしては生きていきづらいということ（関わることにより、選択や楽しみが広がるということ）大人の誰も気づくようになり、人付き合いが苦でなくなってきた。」と述べているように、保護者の価値観は、入園前から構築されていたものばかりではなく、就園する中でも醸成されている⁽⁴⁾。

なお、前稿では、公園のフェンスを一部撤去し、園舎と公園をデッキでつないだことの意義を、動線の確保等と園からの一方通行的に筆者は捉えていたが、改めて園長に話を伺うと、フェンスがなくなったことで、保護者は勿論、公園を利用する地域の方も園に声を掛けやすくなったと感じているとのことであった。保護者の中には、「園庭としては、部外者の出入りが自由で防犯カメラもなくセキュリティが甘い」と感じる方もおり悩ましい面もあるが、ウッドデッキが公園を介して園と地域が双方向に関わり合う場となっていることや、フェンスの撤去による心理的な開放感による交流の促進は、いふくまち保育園に限らず、地域との交流・連携が求められる教育・保育施設にとって示唆に富んでいる。

Ⅲ-3. 公園に対する保護者と地域住民の認識

本節では、保護者と地域住民を区分した上で、公園に対する認識を整理する。アンケートでは、選択肢とその他自由記述を設定し、順位付けを伴って最大3つの回答を

求めており、【表9】には好きなところ、【表10】には課題と感ずるところに関する回答を整理した。

【表9】〈好きなところ〉に関して、保護者は賑やかさ（16名が選択し、内10名は1番に挙げる）と治安の良さ（13名が選択）が多いのに対して、地域住民は清潔さや樹木の手入れ（ともに10名が選択）が多いことは、属性をよく反映している。とはいえ、保護者も、清潔さや樹木の手入れを選択する方は多い（ともに9名）。その中で、「(前略) このアンケートを答えていて、公園愛護会は知っていたけれど、あまり自覚もなかったのので、毎朝清掃してきれいにたもっていることにもっと敬意を払いたいと改めて思った。」や、「園に子どもを預けているので、公園のビフォーアフターを知っています。(中略) お休みの日に‘保育園の横の公園行きたい’と言うので、‘楽しいことができる場所’として認知しているのだと感じます。それもこれも園のスタッフさんのお陰で、月1回の清掃は参加できるときのみですが、今後も協力していきたいです。」と、保護者にも、整備された公園を利用する意識から、主体的に参画する意識への深まりが感じられる。また、その参画を他園に就園させている地域住民が、「(前略) 地域活動というとはよそから来た者や忙しい世代には参加しづらいもの、若い世代の意見は反映されにくいものというイメージがありますが、公園の維持管理を通じて親世代が地域につながりを持てるのはとても良いなと思います。(以下省略)」と受け止めていることも合わせて注目される。

【表9】公園の好きなところ上位最大3つ（人）

	地域住民16名※			園児の家族21名		
	1番	2	3	1番	2	3
ゴミなどがなく、清潔に保たれていること	3	5	2	1	4	4
樹木や花壇の手入れがなされ、緑が多いこと	5	2	3	3	1	5
果樹や野菜を自由に収穫して良いこと	0	0	0	0	1	0
明るいカラーリングや親しみやすいロゴマーク	2	1	0	1	0	4
日頃から、保育園の園児が元気に遊んでいること (子どものいる賑やかさがあること)	4	1	1	10	4	2
日頃から、保育園のスタッフが気さくに話しかけてくれること	1	2	0			
バザーや餅つきのように、地域のつながりや活性化の拠点になっていること	0	1	4	0	3	3
保育スタッフや地域住民がよく利用するようになり、治安面で安心であること	0	4	2	4	7	2
その他の自由記述回答	「遊具の充実」 「プール遊びなどへの参加」			「遊具の充実」 「園から直接公園に出られる」		

※「普段は使わないので分からない」と回答のあった1名を除く16名である。

【表10】 公園の課題上位最大3つ（人）

	地域住民16名			園児の家族21名		
	1番	2	3	1番	2	3
週末などにゴミが散乱していることがあること （自由記述での「猫のフン」を含む）	1	0	0	4	1	1
保育園の園庭のようで、入りにくく感じる	5	0	0	1	3	0
子どもがいつもいて騒がしく感じる	1	0	0	0	0	0
子どもがいることが多いので喫煙できない	0	1	0	0	0	0
その他の自由記述回答 （右記以外の回答は本文で取り上げる）	「暗い」			「死角と道路の車のスピード」 「雑草の多さ」		
特になし	6			12		

【表10】の課題では、＜園庭のようで入りにくい＞という回答が、地域住民（5名が1番目）と保護者（合計4名）で共に多い⁽⁵⁾。ただし、課題ではなく、園の取り組みを好意的に受け止める中で、自分以外の地域住民から課題と認識される不安や懸念のニュアンスでの回答と判断できるものである。というのもまず、保護者に関しては子どもの利用者側であり、その他の自由記述での「街区公園なので音の問題が近隣住民に出ないか不安」と合わせて、言うまでもなく懸念のニュアンスである。つぎに、地域住民の状況を、＜騒がしさ：表中のF＞を課題に挙げた方と合わせて【表11】に整理した。

【表11】 占有や騒がしさを課題として挙げている地域住民の状況

	家からの距離	利用頻度	利用目的	愛護会	清掃	賑やかさ
A	徒歩1分	月に1回	運動や趣味等	○	○	2番目
B	徒歩5分	月に数回	子どもと一緒に	○	×	なし
C	徒歩15分	月に1回	子どもと一緒に	○	△	1番目
D	徒歩30分	年に数回	イベント参加	×	×	なし
E	徒歩・無回答	月に1回	子どもと一緒に	○	△	1番目
F	自転車3分	週に複数	・運動や趣味等 ・子どもと一緒に	○	○	なし

※＜愛護会＞
＜清掃＞の記号は「知っていた：○」「知らなかった：×」「知っていたが、毎日とは知らなかった：△」

実際の課題というより懸念であると判断する理由は、この中では比較的使用頻度の高いBが、「以前は酒を片手におじさんがねころんでいる薄暗い公園だと感じていました。現在はとてもきれいにして明るい公園になって素晴らしいと思います。」と園の取り組みを評価していることや、Dは比較的遠方に居住し公園の利用頻度がそもそも高くないことがある。また懸念と判断するより直接的な理由には、＜公園の好きなところ＞での回答がある。【表11】の項目＜賑やかさ＞は、【表9】で整理した＜公園の好きなところ＞で、日頃から公園に園児がいることを選択していることを表す。A・C・Eが該当する中で、Aは自由記述においても、「以前の古小鳥公園は木がおいしげり、見晴らしも悪くちょっと危ないと感じる公園でした。（中略）今はきれいに整備され、保育園がお休みの日でも子ども達でにぎわう公園になり、地域住民としてはとても感謝しています。（以下省略：下線部は筆者による強調）」と、毎日子どもが利用している状況を肯定的に捉えている。

なお、〈騒がしさ〉を挙げるFは、「街の中でちょっと一息つける小さなスペース」として「保育園ができる前から公園のファン」という思いから課題としているが、F自身、子どもと一緒に利用することもあり、深刻な課題とはいえない。ただし、都市部の街区公園に大人の息抜き空間のニーズがあること、その際に他者との関わりを必ずしも求めていない方がいることに保育施設は留意する必要があるといえる。

加えて、以上の整理と分析に対して、いふくまち保育園は地域住民に恵まれたとするのではなく、「好きなどころと課題の回答（筆者補足：〈賑やかさ〉と〈園庭のよさ〉で入りにくい〉の両方を1番目に選択）は相反しますが程度の問題だと思います。（特に問題はない。）むしろ許容していく世の中にならないといけない。（以下省略：下線部は筆者による強調）」というEの思いを、保育施設や公園管理者の努力だけに頼ることなく広げていくことが肝要である。

さて、占有や騒がしさは懸念に止まっているという分析や、【表10】での課題が「特になし」という回答の多さに関しては、調査対象者がイベント参加者であること（強い不満を抱えている地域住民がいた場合、公園バザーには来場しないこと）を踏まえた抑制的な認識が必要ではあるが、保護者からは既に、他の保育施設への普及を期待する声も寄せられている。その中で、地域のつながりや子育て支援の充実といった波及効果も期待する保護者の自由記述を最後に紹介しておく。

「子どもが生まれてあちこち公園を回るようになり、あまりに殺風景で（というかシンプルズベストみたいな感じ）、いるだけで心地いいなという空間って少ないなあと感じた。大人も子どもも季節の変化を感じたり遊び方を変えられるような公園がもっと増えたら良いと思うが、手入れが問題と思うので、公園+保育園（愛護会）というやり方がもっと広がっていくとよいのではないかと思う。保護者として草抜きやバザーなどに関わることで、地域で暮らしている実感も持てると思う。子どもが卒園して小学生になっても、何か悩み事ができた時、知っている誰かに会いに行ける空間になるという点でも良いと思う。（下線部は筆者による強調）」

おわりに

本稿は、公園の環境整備に携わるいふくまち保育園の関係者、すなわち、園児、保育者、保護者、地域住民の公園環境の受け止めに把握することで、公園環境の維持管理に保育施設がより主体的に携わる公園活用への視座を深めることを目的としていた。

第I章では、保育者へのアンケート調査の結果をまとめた。自身が整備した場所を望ましい環境と捉え、園児の姿にその成果を感じる保育者の回答に見られる環境整備への肯定的な姿勢は、公園という公共空間ゆえの人的交流も前向きに捉え、占有回避という制約にも真摯に向き合う原動力となっているといえる。

第II章では、写真投影法により把握した園児の公園環境の認識を分析した。第I章で整理した保育者のハザードへの危惧は、園児の遊び方からも裏付けられているだけに、公園を保育に活用する上での安全確保の方策を今後も検討する必要がある。また、限られた分析対象ではあるが、年長になり、体の動きや遊びの拠点としての欲求の高まりが伺われる〈高所〉の充実の必要性も確認したが、公園だけで充足を図れるものではないので、公園以外の園外保育も含めて考えることが求められるものである。

第Ⅲ章では、公園バザーの機会を通して、保護者と地域住民に行ったアンケートの結果を分析した。保護者と地域住民がそれぞれの立場で治安の良さや清潔さを好ましく感じている中で、保護者にも公共空間としての公園に主体的に関わっていく意識や地域とのつながりの契機として前向きに捉える意識が見られた。また他方では、園庭のようで入りにくいという回答が一定数見られたものの、実際の課題というよりは、いふくまち保育園の取り組みを評価する中での懸念と認識できた。ただし、大人にとっても居心地の良い公園という視点や、子どもに寛容な地域を園だけに依存することなく構築していくことの重要性も指摘した。

いふくまち保育園の取り組みは、公園の維持管理に携わることで、地域づくりにも貢献しており、示唆に富む事例である。本研究が他の地域、保育施設の取り組みに対して何らかの貢献があることを期待するが、そこでは、本論でも触れた、地域に対して保育施設を開いていく姿勢が欠かせない。保育施設として、乳幼児と保育者の空間であることを当たり前とせず、「公園のようなパブリックスペースに、0～5歳+地域の小学生などに加え『いいもんだウォーキングの会』の高齢者が交わることが興味深いことだと思います。」という保護者の自由記述もあるように、園児が生きる社会の視点で、園児が、そして保育者・保護者も多様な他者と出会える場として、外遊びの保障に止まらない公園活用を検討していきたい。

注

- (1) 椎野（2017）に倣い、本稿でも、認定こども園、幼稚園、認可保育所、認可外保育所の総称として「保育施設」と表記する。また、研究対象のいふくまち保育園を指すことが文脈から明らかな場合、「園」と略記する。
- (2) いふくまち保育園HPにも掲載されている公園俯瞰図のイラストデータの提供を園長から受け、設備の名称など必要な情報を筆者が追記している。
- (3) 2021年11月の訪問時には芝生は枯れていた。園庭でも同様だが、踏圧がある中で芝生の根付きを保障することは困難である。いふくまち保育園では芝生化の失敗を、子どもがよく外遊びをしている証と前向きに捉えながら、今後を検討・模索している。
- (4) 待機児童を選択理由とする他の2名の内、第3要因の1名は「（前略）地域の方と一緒に街ぐるみで子どもの成長を楽しんでいるところ」と園の開放性に満足している。第1要因のもう1人は、小規模園に抱いていた不安が解消されたと述べており、地域の多様な大人との関わりを肯定的に受け止めていると推察される。
- (5) 選択肢＜園庭のようで入りにくい＞に類似する地域住民の自由記述に、「以前は小学生がこじんまりと遊んでいました。今は分かりませんが、そんな子どもたちも自由に出入りできると良いな～と思います。」があるが、第Ⅰ章で触れたように、小学生のみでの利用もある。

主要参考文献

- ・ 椎野亜紀夫 (2017) 「保育施設利用から見た面積狭小公園再評価の手法に関する検討」『ランドスケープ研究：日本造園学会会誌』80 (5)、489～492頁。
- ・ 三輪律江他 (2008) 「保育施設の‘屋外遊技場’としての公園の代替利用に関する研究」『住宅総合研究財団研究論文集』NO.35、131～142頁。
- ・ 拙稿 (2022) 「公園の管理組織を保育所が担う意義と課題 (1) —いふくまち保育園 (福岡市) の事例を通して—」『東北文教大学紀要』第12号、1～10頁。

付記

本研究はJSPS科研費 JP18K02483の助成を受けたものであり、本稿は、日本保育学会第74回大会での発表「保育園による公園活用の意義と課題(2)」の内容を整理し、第Ⅲ章の全てを含め大幅に加筆したものである。また、要旨を、次の特集原稿で紹介している。下村一彦・酒井咲帆 (2022) 「地域に対して園を‘開く’保育園が担う公園管理」『ランドスケープ研究』86 (3)、220-221。なお、研究の遂行に際しては、東北文教大学・同短期大学部研究倫理審査委員会の審査を受け、調査手法や内容の承認を受けている。

謝辞

前稿に引き続き、本研究にご協力くださった、いふくまち保育園・ごしょがだに保育園の関係者の皆様、アンケートにご協力頂いた地域住民の方々に深く感謝申し上げます。